HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古典的主流理論におけるパワーとパラダイム ： 国際関係理論における主概念と三つの分析レベルの相互関係
Author(s)	渡部, 淳
Description	研究ノート
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 55, 147-165
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38499
Type	departmental bulletin paper
File Information	55-p147-165.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

古典的主流理論におけるパワーとパラダイム
―国際関係理論における主概念と三つの分析レベルの相互関係[1]

渡　部　　淳

1．序　　論

国際関係論の諸理論を思考する場合、3つの分析レベルが用いられる。存在論、認識論、方法論レベルの3つである。存在論とは研究される「べき」（政治的）アクターあるいは現象を、認識論は基底的世界観を、方法論はそれらの2つの基礎の上に構成される研究枠組みを扱う。だが、この3つのレベルの中、もっとも重きをなすのが存在論レベルである。世界を構成する存在論のレベルで、アクターは大きく分けて3つある。それは主権国家と非国家主体、そして国際機構である。ある理論のパースペクティブは領域主権国家こそが唯一の、あるいは至上のアクターであると認識し、他の理論のパースペクティブは非国家主体こそが従来の国家間関係としての国際関係を超えていくと考える。また第3の者は、それらを束ねる国際的な機関や規範が国家および非国家主体の両方に影響を与えると考えている。現実主義国際関係論、自由主義国際関係論、そしてこれら主流派に対抗する批判的諸理論のパースペクティブ[2]のいずれも究極的には存在論のレベルにおける3つのアクターのそれぞれにどのようなアクセントをおいて国際関係を語るのか、ということから決して無縁ではない。むしろ、それこそが認識論や方法論レベルに先行する。3つのうちどのアクターのカテゴリーに焦点を絞るのか、あるいは分析の軸足を置くのかということこそが、20世紀に英国で国際関係論が大学で教えられるディシプリンとして誕生して以来[3] 21世紀の今日に至るまで、国際関係論の諸理論、諸学派、あるいは

1　編集過程で貴重なご指摘をいただきました方々に心から感謝いたします。

2　国際関係論に存在する諸理論を、各々どのように名づけ、またそれらのいくつかをまとめて分類するのか、という問題については様々な方法があるが、例えばビオッティとカピは、①現実主義とその系譜（realism, neo-realism など）、②自由主義とその系譜（liberalism, neo-liberalism など）多元主義 pluralism、マルクス主義の批判的理論を③グローバリズム globalism と大きく三つの潮流に分けている。Viotti, P. R. and Kauppi, M. V. (eds) (1999) *International Relations Theory: Realism, Pluralism, Globalism and Beyond* (Boston: Allyn and Bacon).

3　学問分野としての国際関係論の歴史は一世紀に満たない。現代の国際関係の研究は第一次世界大戦直後に始まったが、その焦点は、戦争勃発の要因と再発防止手段にあった。大学に最初の学部と講座が設けられたのは英国であり、最初に現在のウェールズ大学のアバリストウィス校（当時のアバリストウィス大学）そして

個々の学者たちは、三角形の１つである国家云々の存在論レベルに基づいて、その後に初めてどのように世界を分析し記述するのかという認識論や方法論の基本を定め、かつ各々のパラダイム[4]／世界観を規定するという思考順序を踏襲し続けてきた。

存在論レベルでの国家主体と非国家主体の関係への理解と取り扱い方は、現代国際関係論を考察する上で避けて通れない問題ではある。なぜなら20世紀から今日へと続く世界は、２つの世界大戦と冷戦、そして並行する形で加速度的に進行するグローバリゼーションという、未曾有の不安と変化の中で出現する新しい現実の諸局面に対して、その理解の不断の更新や世界像のパラダイム再編成をよぎなくされてきたからである。国際関係論は、その可変的状況に添うようにして、その後に世界とは何か、国家とは何か、何が世界の動向を決定し、戦争はなぜ発生し、平和はどのように維持されうるのか、という世界理解に関わる認識論上の各命題を問い続け、そして多くの理論的パースペクティブがそれぞれ、その時代に出しうる答えを用意し続けてきた。それはまた、世界においてどのような秩序と変化が存在してきたのか、あるいは望ましいのか、または潜在的にどのようなオールタナティブが存在しうるのかという問いでもあった。

現代においても同様で、例えば現在の世界秩序を形作る中核には、日米欧諸国を中心としたいわゆる先進国の国益と利権を守るために作られた協調と調整のメカニズムがある。しかし、その現況の構図に対して、世界の変化の現実と可能性はそうした主権国家よりもむしろ非国家主体の自由と独立の方にあり、グローバルな社会変化の可能性は、非国家主体とその連携の中にこそある、という新しい視点が突きつけられている。世界における国家と非国家主体との相互の相対的関係と、世界政治あるいはグローバリゼーションにおける布置を分析することは、国際関係論における世界認識の特質と問題点を分析することでもあるのである。つまり、現実的には国際関係論の認識論といっても、結局国家主体云々の存在論的レベルでの話がまず先験的に前提とされ、そこがすべての思考の出発点となるのである。

国際関係論の秩序と変化におけるそうしたアクターに関する議論は、1930年代の第１次世界

LSE（London School of Economics ロンドン大学政治経済学校）、オックスフォード大学である。大学で国際政治経済学の講座が初めて設けられたのも、英国のウォーリック大学政治国際学部である。4　パラダイム（paradigm）は「説明のためのモデル•様式」と一般には考えられているが、国際関係論の場合はむしろ（例えばホフマンが言っているように）「研究を行うにあたっての方向性」や「分析の枠組み」（frame of reference）という意味に近い場合もあり、筆者はどちらかというと国際関係論のパラダイムは後者に近いと考えている。スタンリー•ホフマン「序文：「アナーキカル•ソサイエティ」再論」、ヘドリー•ブル『国際社会論：アナーキカル・ソサイエティ』岩波書店、2000年、p. xv. の臼杵の訳注を参照。

4　パラダイム（paradigm）は「説明のためのモデル•様式」と一般には考えられているが、国際関係論の場合はむしろ（例えばホフマンが言っているように）「研究を行うにあたっての方向性」や「分析の枠組み」（frame of reference）という意味に近い場合もあり、筆者はどちらかというと国際関係論のパラダイムは後者に近いと考えている。スタンリー•ホフマン「序文：「アナーキカル•ソサイエティ」再論」、ヘドリー•ブル『国際社会論：アナーキカル・ソサイエティ』岩波書店、2000年、p. xv. の臼杵の訳注を参照。

大戦後の国際連盟に平和を見た理想主義国際関係論と、第２次世界大戦勃発への不安を危惧しその発生を反省する現実主義国際関係論との間の論争から本格的に始まる。このときの理想主義のパースペクティブには、後に自由主義国際関係論を経て体系化しまとめ上げられていく国際制度主義と国際的規範に関わる議論がすでに含まれていた。カー[5]やモーゲンソー[6]に代表される現実主義の学派は、第２次世界大戦への反省と冷戦の発生から、主に軍事的権能とそれを支える生産力を備えた国家、特に大国の存在と行動を基本として、戦争がないという意味での平和を国家間のシステムと秩序に求めて議論を体系化するのである。これに対して、コヘインやナイに代表される自由主義およびそれ以降の議論は、世界政治の結果に影響を与える構成要因の多元性を認識し、国内においては非政府あるいは非国家の性格を持つ主体、またグローバルなレベルでは国際的諸制度や非国家主体の越境的組織をアクターとして認め、より多様なアクターからなるパラダイムを開いていく。

本論では、国際関係論の理論的枠組みの中で、異なる潮流間でも暗黙のうちに受け入れられている「パワー」概念の影響力を事例として、理論における「主概念」と、各分析レベル（存在論・認識論・方法論）との相互関係を考察し、同時に国際関係論の主流理論である、現実主義と相互依存論（自由主義）の議論の多様性と広がりを再点検することを目的としている。まず、前半では現実主義におけるパワー概念の振れ幅を示し、後半ではその現実主義に対して相互依存論が行う挑戦から帰結したパラダイム変換の様子を示す。

２．モーゲンソーとカーにおけるパワー

アーノルド・ウォルファーズは、これ無しにはどんな指導者も外交政策の遂行を失敗するとする２つの道具を定義した。その２つとはパワーと影響力であり、これら２つは「共に手を取り合って」[7]おり、「影響力の重要性は、通常の場合パワーの重要性の次にくるものである」[8]。本節では現実主義者におけるパワー概念の中心性を示すと同時に、その現実主義的な国際関係論にみられる多様性を、古典的な２人の現実主義者、E.H. カーと H.J. モーゲンソーを比較し対照させることで示す。本節ではまず初めに、国際関係理論におけるパワー概念の要約と、パワー概念の多様性と違いを諸学者の主張によって追う。次にカーとモーゲンソーの重要性と、ここ

5　Carr, E. H. (1939) *The Twenty Years' Crisis 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations* (London: Macmillan).

6　Morgenthau, Hans J. (1948/2005) *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace* (7th edition), New York: McGrew Hill.

7　Wolfers, Arnold (1962) *Discord and Collaboration: Essays on International Politics*, Baltimore: The Johns Hopkins Press. p. 104.

8　ibid. p. 108.

に取り上げる妥当性を述べ、(1)パワーが理論の基礎としてどのような重要性と中心性を持つのか、(2)2人の理論家の間でパワーの概念はどのように違うのか、(3)現実主義者たちにとって、どんな意味でパワー概念は平和にいたる重要な方法論であるのか、の3つを議論する。

カーとモーゲンソーについて議論する前に、パワー概念へのアプローチの諸相について若干展開する必要があるだろう。パワー概念は、勢力均衡、核抑止、そして初期の地政学的諸政策のように、国際関係論における政治的現実主義の理論的基礎である。これに対して、現実主義以外の諸理論、例えばマルクス主義系譜の理論や理想主義論は、他の諸概念、すなわち「解放」や「秩序」を、平和を実現するための手段と捉えている。パワーの概念は、いわゆる「パワー・ポリティクス」の中心的動因ではあるが、同時に現実主義者にとってこのパワー概念が平和を考察するための方法論であることの重要性に対しては、慎重な分析がなされるべきである。そもそもパワーといっても、諸学者によってパワー概念は大きく異なる。一例を挙げれば、A.F. オルガンスキーは「人口」がパワーを構成すると考え、また著名なナイの議論のように、「ハード」と「ソフト」という異なる2類型のパワー分布について考察したようなものもある。このように概念としてのパワーそれ自体も一定ではなく、その理論毎その都度様相を異にするいささか曖昧な存在なのである。パワー概念は、つまり、常に安定した定義や内容をもつものではなく、歴史的状況の変化、説明される問題とその領域、あるいは理論家のイメージにあわせていくらでも姿を変える、そして事実また再定義され続けてきたぬえのような歴史を持つといえるのである。パワー概念のこのような揺れと振幅の大きさをみるならば、現実主義とはいっても、それは決して1つのまとまった、首尾一貫した思考伝統ではなく、異なるタイプの理論家の集合と考える方がよく[9]、またそのように考えることによって、政治的現実主義の潮流内部における、相互に異なる理論家たちを比較し考察することも可能となるのである。

カーとモーゲンソーを取り上げるにあたって、この2人の理論家を取り上げる妥当性と、その選択の重要性に関する説明をしなければならないだろう。E.H. カーとハンス・モーゲンソーは広く、近代的あるいはその中でも「伝統的」現実主義の開祖の父として広く認識されている[10]。また、モーゲンソーは指導的かつもっとも著名な戦後の現実主義者であるが、カーはマーティン・ワイトらとともに、時にはどちらかというとマルクス主義の影響を指摘されつつも、現実主義国際関係論の最初の開拓者として理解されている[11]。現実主義の中でも、内容的には異なるものの、現実主義的パースペクティブの核心的前提を共有する[12] モーゲンソーと、ケネス・ワル

9 Dunne, T. and Schmidt, B. C. (2005) “Realism” in Baylis and Smith (eds.) *Globalization of World Politics*. Oxford: Oxford University Press. pp. 165–167.

10 Burchill, S., Linklater, A., et al. (1996) *Theories of International Relations* (Basingstoke: Macmillan). p. 67.

11 Bull, H and Holbraad, C. (1979) “Introduction” in Martin Wright, *Power Politics* (Second edn) Middlesex: Pelican Books. p. 19.

12 Viotti and Kauppi (1993) p. 11.

ツのような新現実主義者とを比較するよりも、E.H. カーの『危機の20年』とモーゲンソーの『諸国民間の政治』という、差異の大きい２人を比較する方が、現実主義そのものと現実主義の多様性を説明する上ではより意義深い。ケネス・ワルツ（構造的パワー）やジョセフ・ナイ（ソフト・パワー）は、いずれも多かれ少なかれモーゲンソーのパワー概念を批判しているものの、つまるところモーゲンソーのパワーの伝統的諸解釈に修正を加えたものと考えることができるからである。

現実主義国際関係論にとって、理論の基礎はパワーの概念であるという議論をするために、ここではカーとモーゲンソーのそれぞれの理論がどれぐらいパワー概念に依存しているのか、まず、（２人とも政治的現実主義であるので）パワーと国際関係あるいは政治との関係、次に、パワーと無秩序（アナーキー、anarchy）の因果関係、そして国際政治における主題及び対象としてのパワーのコンセプトをいくつかの点によって考察していきたい。

国際関係論の現実主義者たちにとってのパワーとは何かについて考えるとき、モーゲンソーの政治的現実主義の６つの原則のうちの１つ、すなわち「国際政治は、パワーの文脈において定義される利益のコンセプトである」[13] という表現は非常に示唆的である。この文言は、パワー概念の存在そのものが、国際政治（とその分析）にとっていかに必要不可欠なコンセプトであるかを示しているからである。「パワー概念がなければ、国際政治の研究はほとんど不可能である」[14] と。

一方、モーゲンソーとは敵対するカーもまた、政治の不可欠な要素としてのパワーの重要性を認めている[15]。パワーの文脈において排他的に定義されなければ政治は満足には定義しえないし、またパワーは常に政治の必須要素であると言うのが無難であると彼は述べ[16]「政治はパワーからは切り離せない」[17] とする。モーゲンソーにとってパワーは厳然たる理論の基礎であり、パワーこそが政治の出発点であるというパワーに対する極めて決定主義的アプローチをとるのに対して、カーにとってパワーは現実に対する政治を構成する多要素のうちの「一要素」にすぎず、パワーに対するアプローチはモーゲンソーよりも、多元的で視点も多角的である。モーゲンソーとカー２人の政治とパワーの関係に関する考え方は、実際にはずい分と異なる２つのアプローチを見せている。

パワーとアナーキーとの関係ではどうだろうか。モーゲンソーによれば、国際政治はパワー

13 Morgenthau, H. J. (1973) p. 5.
14 ibid. p. 5.
15 Carr, E. H. (1946) *The Twenty Years' Crisis 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London: Macmillan. p. 106.
16 ibid. p. 102.
17 ibid. p. 97.

獲得への闘争である[18]。パワーは方法であると同時に目的であり[19]、パワーへの闘争とパワー間闘争が、国際政治の異なる問題領域で起きている[20]。したがって、特に諸国民（国家）によるパワーの追求は国際政治のレベルで争奪戦や競争を引き起こす。カーは、これとは対照的に、パワーへの理論的な固執それ自体が、観察者をアナーキーな世界観に陥れてしまうと警告する。米国のモーゲンソーは（ホッブズ的）万人の万人に対する闘争を基本として、それがパワーを求める人間の本性や、（その人間に擬せられた）パワーを希求する国家の基本性向という見方へと帰着させていく。英国のカーは、パワー概念やパワーへの固執から国際政治を解する見方は排除的で狭いものであり、私たちの思考様式を無秩序な思想へ導くと批判する。モーゲンソーはパワーという考え方に全てを限定して、パワー以外の他の要素に対して非常に排除的となるのに対して、カーの方は、パワーを「いまここに厳然と存在する何か」としてではなくて、概念を形成する私たちの心理の中にある何かとして分析している。

こうしたカーとモーゲンソーの関係は、［subject（対象／主体）／object（対象／目的）］という対立概念を通して考えてみるとより明瞭になる。モーゲンソーとカーにおいて、パワー概念は、政治理論にとっては非常に重要な基礎であり、国際関係を説明する分野としての、国際関係論の subject そのものであった。モーゲンソーにおいてパワー概念の地位はほとんど絶対的であり、国際政治において、パワーは同時に object でもあるが、カーでは、パワーはただ単に国際関係を説明するための無条件な subject ではなく、むしろそのパワー概念そのものが批判的に精査されなければならない、非常に深刻な問題であるところの object であると捉えられている。

彼ら 2 人の代表作で、それをもう少し詳しくみてみよう。モーゲンソーの巨大な代表作『諸国民間の政治：パワーと平和への闘争』においてパワーがどのように定義され、またパワーがどのようなものとして捉えられているか、結論から言うと、彼のパワーの概念は、かなり心理学的なものに傾倒しており、抽象的でかつまた曖昧な部分を残すものである。「パワー」が突如「政治的パワー」へとすり替えられているケースも多く、すなおに納得することはむずかしい[21]。

> 私たちがパワーというとき、ある人間の、他の人間の心や行動に対するコントロールのことを意味するのである。政治的パワーという考え方は、公的権力の保持者の間の相互関係のことであり、広く取るならば公的権力と人民の間の関係でもある。

18　Morgenthau op. cit. p. 27.
19　ibid. p. 27.
20　ibid. p. 28.
21　ibid. p. 28.

> [...]
> 政治的パワーは、そのパワーを行使する者と、行使される者の間の心理的関係である。政治的パワーは、前者の後者の心理に与えるインパクトを通して、前者の後者に対するコントロールをもたらす。このインパクトは次の 3 つの源泉を持つ。つまり、利益への期待、不利益への恐れ、そして人間或いは諸制度に対する尊敬や愛である。政治的パワーは、秩序、脅威、ある人間や政府の権威やカリスマ、あるいはこれら全ての組み合わせによって行使される[22]。

一般によく指摘されるように、通常彼の基本的議論は軍事主義的な価値観に基礎をおいているが、このことは世界大戦前後という本著作の成立した時期の歴史的情況を考えれば容易に理解できる。ところが、面白いことに彼はこの政治的パワー概念からその軍事的側面を除外する。物理的暴力の直接的行使であるところの軍事的力を政治的パワーから区別すべきであるとし、政治的パワーと同時に暴力が現実となったとき、軍事的なパワーすなわちにせのパワーの使用が人々に許されるや、政治的パワーは廃止されるとモーゲンソーは主張するのである[23]。

では、カーはどうか。モーゲンソーの概念規定と比較すると、カーはより具体的にパワーについて記述しており、パワーの考えと形についてより深く掘り下げた記述を行っている。カーは「政治的パワー」（単なる「パワー」ではない）は、3 つの形式をとると説明する。すなわち、軍事、経済、プロパガンダの 3 つである。

> 議論をわかりやすくするために、国際的な圏域における政治的パワーを 3 つのカテゴリーに分けることができるだろう。[...] これらのカテゴリーは緊密な相互依存の関係にあり、これら 3 つは理論的にばらばらであるものの [...] パワーそのものは一個の全体である[24]。

そして、カーはパワーの 3 つの要素について次のように続ける。

> 軍事的手段が最高度に重要性を帯びるのは、戦争という国際関係においてパワーこそが圧倒的に優位となるという事実による。[...] 経済的な力も、つねに政治的パワーの手段のひとつであり、またその時は軍事的手段とも連携しているのである。経済的

22 ibid. p. 28–29.
23 Morgenthau qtd. In Korany, B., “Social change, charisma and international behavior: toward a theory of foreign policy-making in the third world” in Geneve, A. W., Sijhoff-leiden (1976) *The Third Wold*,, p. 27.
24 Carr 1946, p. 108.

> 要因から完全に独立しているのは、最も原始的な類の戦争行為だけにすぎない。[...] 説得の技術は、つねに政治的指導者に備わっていなければならない必須の部分である[25]。

カーによるこのパワー論において極めて特徴的な点は、政治的（軍事的）なものと、経済及びプロパガンダの間に線引きを行い、それらを明瞭に区別しているところである。経済とプロパガンダは政策あるいは政治の道具として定義されている。「全体としてのパワー」というカーの考え方はモーゲンソーにどことなく類似しているようにも思えるが、カーの政治経済学の文脈と世論操作の能力に焦点をおいたパワーの理解は、モーゲンソーと同時期の刊行というその歴史的時期を考えるならば、国際関係に関する新しい論点であり、またそれから半世紀近くをすぎた現在にあってもその厳しいリアリズムは依然有効である。モーゲンソーは、パワーの内容は歴史的環境の変化に応じて変わると認めてはいるものの、『諸国民間の政治』を見る限り彼の定義そのものはパワーのそのような変化による質的変化を恐れた、強く守りに入った定義となっていることは否めない。一方、カーの定義とパワーの諸カテゴリーはとても挑戦的で、グラムシ的ヘゲモニーやネオ・マルクス主義的ディベートのような現代的議論の中でさえ、一定の有効性を発揮する。

さて、ここまでは、パワーは主として軍事的なもの、あるいはそれとの関連で捉えられているように記述してきたが、ここからはカーとモーゲンソーの比較から、平和（達成）への方法としてのパワーの側面という、パワー論におけるもうひとつの重要な側面をみてみることにする。

平和を創り出す方法論としてのパワーへの考慮は、倫理に対するパワーの関係、あるいは両者の相互関係を解釈することになる。その際、カーとモーゲンソーの両者、そしてほとんどの現実主義者にとって、パワーの行使者あるいはパワーの基本単位は国家である。だが、非国家主体（non-state actor）に対する扱いとなると、彼らの間に差異が生じる。特に、カーの多国籍な企業の類への強い関心などには他の諸家とは異なる非国家主体への配慮があらわれている。それにあたり、モーゲンソーにおいてよく見られる国民（nation）と国家（state）の混同も注意しなくてはならない。

まず、モーゲンソーの『諸国民間の政治』は、パワーと倫理の間の関係に対して矛盾するいくつかのアプローチをとっている。例えば彼は、政治的現実主義は政治的行動の倫理を認識している、と議論するものの[26]、世界を統治する倫理的な法を、特定国家が倫理的に希求するとい

25　ibid. p. 109, 113, 132.
26　Morgenthau 1973, p. 10.

う在り方を確定することを拒否する[27]。ところが、モーゲンソーはこの著作の後半において、倫理をパワーの制限として捉え[28]、国際政治におけるその他のパワーにとって倫理が規範となる、あるいは外部的な制限となるメカニズムについて議論する。まずパワーという概念について非常に決定主義的、絶対主義的な立場を表明しておきながらも、後に倫理性を取り上げ、それが「政治家（あるいは政治指導者）」の意識へアピールすると論じるのである。特有の現実に対する決定主義的前提を支持するモーゲンソーと、そのような世界の否定的前提に立脚しつつも希望的かつ自発的解決を提言するモーゲンソーという２人のモーゲンソーが、バランスをとろうと試みている様子がここには窺える。

それに比すると、カーは倫理の役割についてより肯定的であり、彼の議論はパワーと倫理の間のバランスをとりながら進めていくことをめざす。事実また、彼の主著『危機の20年』において叙述にさかれた割合も倫理とパワーほぼ半々である。そのバランスの在り方をカーは「健全なる政治的思想」として次のように述べる。

> したがって私たちは、健全なる政治思想が、ユートピアと現実の両方の要素に基礎を置くものでなければならない、という結論に立ち返るのである。ユートピアニズムが中身のない耐え難いにせものになり、特権集団の利益の隠れ蓑としてのみ機能するときに、現実主義者はその偽装を暴くというかけがえのない責務を果たすのである[29]。

カーは彼の著作の全体を通じてパワーと倫理の両方を考慮するよう強調しており、同時に、この両者の間でバランスをとるようなアプローチをとらなければならない、としている。モーゲンソーの場合、倫理はパワーを制限する２次的なものとして扱われているが、カーとモーゲンソーのこうした違いは、19世紀及び第２次世界大戦への反省に基づく、反ユートピア主義のみせた異なる反応であるということもできるかもしれない。英国人カーの重要性は２つ、倫理に基づいた政策というものがかつては一度機能していたという事実を提示していること、そしてまたその経験が否定されるべきではないと主張していることである。カーはユートピアニズムへの攻撃で有名ではあるが、これは倫理そのものに対する攻撃ではなく、彼は世界のパワーに基礎をおいた観察と組み合わせながらも、平和を実践していくための倫理性の積極的役割を引き続き高く評価しているのである。

まとめてみよう。この２人の理論家において、パワーは重要であり、また中心的な位置を占めているが、モーゲンソーはパワー概念に固執しすぎるため、パワーは常に国際政治を説明す

27　ibid. p. 11.
28　ibid. pp. 225-226.
29　Carr 1946, p. 93.

る出発点（subject）であるが、これとは異なりカーにとっては、パワーは批判的に研究されるべき対象（object）でもあるということである。パワーという概念について、モーゲンソーはその移ろいやすい傾向を認識しながらも、パワーの考え方は曖昧であり、また極端に政治的なマターとしてのあり方に集中しすぎている。これとは対照的に、カーの経済とプロパガンダの政治化された構造という考え方は、現代の論議でもいまだ有効なものである。モーゲンソーとカーという、国家がパワーの行使者であるという類似の前提を共有する２人も、平和へのアプローチをみせる際、倫理の取り上げ方において、否定的な出発点と肯定的出発点という正反対の地点から出発する。モーゲンソーの問題は、もしかすると彼の著作それ自体ではなく、闘争的で自助的な国家のイメージを誇張したその前半部分ばかりを引用する、後世の国際関係論の学者たちのアプローチの仕方にあるのかもしれない。それでも論議の包括性は、カーの側にある。それはカーの思考がおそらく19世紀の話題（ユートピアニズムへの反応）と20世紀の問題（パワー・ポリティクスへの反応）の２つをともに包み込んでいるからであり、またこの２つの統合に挑戦するという、21世紀の国際関係論研究をもすでに射程におさめているからではないだろうか。

３．相互依存理論はどの程度現実主義に挑戦したか？

ジェームズ・リー・レイによれば、コヘインとナイの『パワーと相互依存』[30]は、現実主義と完全には相容れないともいえないものの、重要な反現実主義的テーマを含んでいる[31]。この『パワーと相互依存』は、著名なワルツの『国際政治の理論』についで10年間で最も引用された書籍でもある[32]。本章では、コヘインとナイが彼らの相互依存の理論によって、現実主義が国際関係論の理論と理解の中に作り上げた、秩序立ての原則にどのように挑戦していったのかを議論する。第１に、国際関係論の異なる学派において、枢要な位置を占めるパワーの概念化の違いについて述べ、現実主義的なパワーの特徴を考察する。第２に、相互依存論がどのように現実主義者の理解の中にあるヒエラルヒーに挑戦したかをみる。これは言い換えれば、①問題領域

30 Keohane, R. O. and Nye, J. S. (1989) *Power and Interdependence*, 2nd edn., London: Scott, Foresman. Power を「権力」と訳すことが多く、この本のタイトルはよく「権力と相互依存」と訳されるが、power は権力とは異なる、あるいはそれより広い概念であるため、ここでは原タイトルが損なわれないように『パワーと相互依存』とする。米国の国際関係論、国際政治学者の多く、例えばモーゲンソーやキッシンジャーはみなドイツ系ユダヤ移民であり、power は「権力」よりも、ドイツ語の Macht「力」のようにより広いコンセプトに近い。

31 Ray, J. L. “Promise or Peril? Neorealism, Neoliberalism, and the Future of International Politics” in Kegley, C. W. (1995) *Controversies in International Relations Theory: Realism and the Neoliberal Challenge*, New York: St. Martin’s Press. p. 341.

32 Onuf, N. G. and Johnson, T. J. (1995) “Peace in the Liberal World: Does Democracy Matter?” in Kegley, C. W. ibid.

間のヒエラルヒーであり、②パワーの目的であり（具体的な方法論レベルでの反軍事主義としての相互依存論）、③アクター間、レベル間のヒエラルヒーである（やや抽象的レベルである存在論上の反国家主義としての相互依存論）。

3-1．現実主義と相互依存論におけるパワー

パワーをめぐる多くの論争は、制度的実践や究極的には暴力的方法を通じて、パワーを行使する国家を主たるアクターに据える世界観に影響され続けてきた。この状況はシャンプリンのように「モーゲンソーの政治的概念としてのパワーは国家が中心となるとする（state-centered）主張は、模範となるに十分足るものである」[33] と述べる者もいる。これに関して、ハンス・モーゲンソーの諸著作に見られる政治的パワーの特質化が、特に国際関係論の分野に応用された理論の中では、いろいろな意味で最も包括的で、影響力においても最も成功したものであるという事実については、国際関係論内で広範囲の合意があるといって間違いないだろう。多年にわたってモーゲンソーは、彼の有名な一文である「国際政治は、他のあらゆる政治同様、パワーへの闘争である」[34] という考えに基づいて、パワーに関する諸説の彼なりのシステムを説明し、擁護し、また再解釈してきたのであった。この一説こそが、まさに現実主義として知られる国際関係論の包括的パラダイムの発展を促進してきたものである。

現実主義者にとって、国際政治は次の点から国内政治と違うのである。つまり、国内政治には、法の支配の影響、共通の慣習、文化、そして政府による暴力的手段の独占に起因する諸制約から発生する限界と管理が存在する。国際的な圏域（sphere）においては、こうした制限や抑止は、現実的な管理を行うにはあまりにも弱すぎるか、あるいは全く存在しないかのどちらかである。諸国家は非常によく定義され、長期間かけて練られ確立された一連のゲーム・ルールに基づいて相互に作用しあい、このようなルールからよく「国際システム」と呼ばれるものが形成される[35]。現実主義者たちはこの国際システムの諸ルールが、アナーキー（無秩序）を生み出していると判断を下す[36]。ここでいうアナーキーという語は、必ずしも完全なカオスやルールの不在を指しているのではなく、どちらかというとルールを強制する能力を持つ第三の審級ともいうべき中央政府的存在の不在を含意するものである。つまり、国際的広がりの中には、ルールを強制し行動規範の遵守を保障する中央権威が存在しないということである。それゆえゴールドスタインが述べているように、ある国家のパワーは他の諸国家のパワーによってしか

33 Champlin, J. R. (ed.) (1971) *Power*, New York: Atherton Press. p. 1.

34 Morgenthau, H. J. (1960) *Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace*, 3rd edn., New York: Alfred A. Knopf. p. 27.

35 Goldstein, J. S. (1994) *International Relations*, New York: Harper Collins, College Publisher. p. 69.

36 Bull, H. (1977) *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, New York: Columbia University Press. pp. 46–51.

相殺することができない。第三審級の倫理に現実主義の見方からはつまり、国家は、連合や国際的規範という形での相対的な制約的パワーを補完するものとして、最終的には己れに、つまり自助の原則によらなければならないのである[37]。

現実主義者は、アナーキーの状態で行われる国際関係の中の世界では、結局諸関係が大変な危険となる事情を理解しているのである。こうしたアナーキーな世界では、外交政策の策定における慎重さが不可欠である。国家は他の諸国家の意図だけではなく、より多くの注意を諸国家の能力に対して向けなければならない[38]。それに対して相互依存論を含む他のアプローチは、世界が相対的には無秩序であるにも関わらず、国際システムは混沌からは程遠いものであることを確信している。なぜなら、諸国家の大半は協力的な考えに基づいた、個別国家よりも大きなカテゴリーをなす行動規範に従って相互に作用しあっていると彼らは考えているからである。これから議論するように、現実主義というは、国際的なアリーナ（闘技場）における諸行為の、実に多くの要素を単純化（あるいは捨象）し、協力と相互依存の可能性を低減させてしまっているのである。

モーゲンソーは前にもみたように、パワーを政治の包括的理論の中心的概念と位置づけている。したがってパワー概念が、ある種の政治の合理的アウトライン、つまり政治的状況の地図を提供していることになる。

> そのような地図は、ある１点から地図上の他の１点へと旅をする合理的な可能性を私たちに教えてくれる。つまり、どのような状況下でどのような旅行者が、どの道をもっとも辿るであろう可能性である。よってその地図は心理を観察するための合理的な秩序の目盛りを教えてくれるし、そのことによって成功する行為のための諸条件の１つを確立するのである[39]。

現実主義の国際関係論の理解をまとめるならば、その特徴はパワー概念の中心性、軍事中心性（方法論上の軍事主義）、そして（存在論上の）国家主義（あるいは国家中心主義）的見方ということになる。

軍事的力への焦点の偏重から、現実主義が現代の世界経済にあまり注意を払ってこなかったことは、ある意味当然である。多くの伝統的現実主義者は、軍事や安全保障問題のレンズに合うように、経済問題の役回りを小さく書いてきたし、かつては経済が相互依存の傾向を有していることを無視していた。ナイたちの『パワーと相互依存』は現実主義が持つこのような欠損

37　Goldstein 1994, op. cit. p. 70.
38　ibid. p. 70.
39　Morgenthau, H. J. (1958) *Power as a Political Concept*, Goldstein, 1994. op. cit.

を批判するものの１つとして適している。ロバート・コヘインとジョセフ・ナイは、相互依存の新しいテーゼを提供し、新しい国際システムへの変質に関する、彼ら独自の考えを複雑な議論で展開している。そして、ここで忘れてはいけないのは、このコヘインとナイの著作が、国際関係論におけるパワーの言説にも、新しい画期をも作り出したことである。

相互依存とは、お互いへの依存のことである[40]。相互依存ということによって、諸国家間や異なる国々のアクター間の、相互の影響・干渉によって特徴づけられる状況が明確に示される[41]。相互依存は、国境を越えたカネ、モノ、ヒト、メッセージなどの流れの、国際的な取引の結果である。相互依存にとっては、この諸取引のコスト意識こそが大切であり、相互依存は常に互恵的ではあるが、必ずしも対称的（symmetrical）なものではないということである[42]。

相互依存論におけるパワーの役割を捉えるためには、私たちはまず敏感性（sensitivity）と脆弱性（vulnerability）という、２つの類似しているように見えて質的に異なるディメンションを峻別しなければならない。これは、特にコヘインとナイの相互依存論におけるパワー理解には必須である。まず、敏感性は政策枠組みの中の反応性の程度のことをさす。つまり、どれぐらいある国における変化が他の国に大きな変化を早くもたらすのか、そしてその影響はどれぐらい大きいのかということである。敏感性はここでは短期的な現象であり、時間によってある程度逓減された外発性コストへさらされていることであり、これに対しては対抗的政策をとる機会が与えられている。これに対して、脆弱性とは諸政策がとられたり変更されたりした後でも、外部での出来事によって課せられるコストに苦しむ、諸アクターの依存性のことを意味する。ここで脆弱性とは、救済的あるいは対抗的諸政策が思考され遂行された後でも、外部で誘発されたそのようなコストにたいして「継続的に」さらされることをも含意している[43]。相互依存の度合いは通常、上記のような諸概念で測られるのである。よって、あるアクターが何かにより依存している状況であるとするならば、それはより脆弱で、より反応過敏であり、しかもより不利益をこうむりやすいといえるのである。

コヘインとナイの現代的な出来事に対する見方は、彼らの複合的相互依存（complex interdependence）の中にまとめ上げられている。このモデルは、相互依存の考え方をさらに推し進め、世界は三つの中心的性質を持つことを提示する[44]。

A）諸社会を結ぶ接触とコミュニケーションの多元的チャンネルが存在する。

B）政府に関わる国際政策の諸問題の間に、重要性のはっきりとしたヒエラルヒーは

40 Keohane and Nye 1989, op. cit. p. 8.
41 ibid. p. 9.
42 ibid. p. 9.
43 ibid. pp. 11-18.
44 ibid. pp. 23-25.

なく

C）軍事力は、政策の効果的道具ではなく、複合的相互依存が優勢である国際関係の問題領域では、むしろその軍事力の使用が意図した効果を縮減させてしまうこともある。

軍事力を相対化ないしは回避しようとするのである。この相互依存の理論は現実主義的国際関係の理解である、（存在論という分析レベルでの）軍事主義と国家主義に対抗する言説としての意味をもつ。次節ではこの可能性を議論し、国際関係論の枠組みで再編成してみる。

3-2．反軍事主義としての相互依存論：問題領域間のヒエラルキーに抗して

相互依存論は実際のところ、現実主義国際関係論の考え方を一概に否定しようとしたり、根本的に批判しようとしているものではない。コヘインとナイは、現実主義者の理解にもある程度の妥当性を認めているのであるが、軍事力の過度な誇張と、軍事的文脈による最重要問題としての「国家安全保障」が最上位に布置されている、問題領域間のヒエラルヒーによって秩序付けられた、あまりにも単純なモデルに対しては同意しないのである。それを彼らは、問題領域間の「ヒエラルヒーの不在」として論議するのである[45]。

コヘインとナイにとって、複合的相互依存状態の出現は、必ずしも軍事力の価値の終焉を意味しないし、「軍事的相互依存は常に存在してきたし、軍事力は依存として世界政治において重要である」[46] と考えている。彼らは軍事力の論理と価値を完全に拒絶しているのではなく、軍事的現象を現代世界の「１つの」相互依存の事例と化することにより、複合的相互依存の図式の中に軍事力を布置し相対化するのである。

経済的パワーが常に国際関係を説明するわけではない[47]。「軍事的パワーは、深刻な軍事力の行使に対して経済的方法のみでは、十分な効果が得られないという意味において、経済的パワーに勝っているといえる」が、この脆弱な非軍事的パワーに対する軍事的パワーの優越も、必ずしもつねに有効な考え方ではない。なぜなら、軍事力とその行使によるコストが、他の手段と比べてより効果的であるとの保障はどこにもないからである。コヘインとナイは「取り組んでいる関心事がより重要になるほど、諸アクターはより高い優越性とコストに位置づけられる、パワー・リソースを行使する傾向がある」[48] とする。このことは、相互依存論が、アクター間の緊密な相互依存、特に経済的相互依存という考えを使って、限定的にではあるが、軍事中心の

45　ibid. pp. 26–27.
46　ibid. p. 4.
47　ibid. p. 16.
48　ibid. p. 17.

現実主義者の世界観に挑戦していることを意味する。では、相互依存論側からの現実主義に対する挑戦は、方法論分析レベルの経済主義と軍事主義の戦いにとどまるものなのであろうか？答えは、NO である。なぜなら、複合的相互依存論の中心的議論は、経済中心主義的な理論による新しい問題領域間のヒエラルヒーの創出にあるのではなく、単に軍事中心主義的な現実主義理論の問題間のヒエラルヒー構造自体を方法論のレベルで終わらせることにこそあるからである。

現実主義のパワー観について、コヘインとナイは、現実主義の「見方は軍事パワーが他のパワーの諸形式を制圧してしまっていて、世界情勢はあたかも最も軍事的パワーを持つ諸国家がコントロールしているかのようである」[49] として、軍事的パワーを頂点に頂くヒエラルヒー的配置の是非及び存否を議論する。相互依存論は、現実主義の前提の中には「軍事的安全保障の諸問題を筆頭とする、世界政治の中の問題間のヒエラルヒーがあり、ここでは軍事安全保障の「高政治」（high politics）が経済や社会的情勢の「低政治」（low politics）を圧倒してしまっている」[50] と難じ、現実主義そのものの見方に挑戦をしているのである。相互依存論者が「問題領域間のヒエラルヒーの不在」という非常に意義深い用語を用いるとき、それは軍事安全保障が、継起的に生じる全てのアジェンダを支配しているわけではない、ということをも意味している。このことからもこの「ヒエラルヒーの不在」は、現実主義的思考の軍事主義と、この軍事主義に支配されたヒエラルヒーとに対し存在論の側から挑戦する、自由主義的言説であると解釈し主張することができる。

このような挑戦は、国際関係に存在する様々な動態的なダイナミズムにフォーカスする、相互依存論の柔軟性からも可能となっている。「相互依存」それ自体の特徴は、現実主義的な静態的世界観への挑戦でもあり、『パワーと相互依存』冒頭にある「私たちは相互依存の時代に住んでいる。この曖昧なフレーズはきちんとは理解されてはいないものの、世界政治は変化し続けているという、世界政治の根本的性質に対する広く普及した感覚を表現しているのである」[51] という一節に、はっきりと宣言されているものでもある。

分析における反軍事主義としての相互依存論は、つまるところ「問題領域間のヒエラルヒーの不在」という言説によって結論付けられるものであり、この言説は現実主義内部の認識的ヒエラルヒーを明瞭に整理する意義を有し、かつ、政治的パワーのあまたある諸形式や、現実主義以外の諸学派に対して巨大な課題や反論としてそびえ立つ、現実主義的思考様式における軍事主義を、批判的に精査することを可能にするものである。

49　ibid. p. 11.
50　ibid. p. 24.
51　ibid. p. 1.

3-3．反国家主義としての相互依存論：アクター、レベル、諸関係のヒエラルヒーへの挑戦

相互依存論は、問題領域間のヒエラルヒー以外にも、国際関係の理解における現実主義者の持つその他のヒエラルヒー概念とも衝突する。そこでの中心的議論は、相互依存論は分析上の国家（唯一）主義に対する反国家主義の理論であるということである。例えば国家と非国家主体といったアクター間のヒエラルヒー、国際関係論における「国際」レベルの「国内」政治への優位性、国際関係における外交アジェンダの政府・外務省による独占、などの根本的なヒエラルヒーへのこれは、反旗である。

これまで見てきたように、現実主義国際関係論において、国家こそが国際システムを構成する首尾一貫した第１の単位であるところの、支配的（唯一の）アクターであるというのが、もう１つの支配的概念である。だが、コヘインとナイはこの国家中心的、言い換えれば「国家主義」を、利益の説明を通じて疑問視している。「パワーの源泉を異なるものに持つことは、国内、トランスナショナル、そして政府という異なる利益が関わっているので、相互依存の政治が異なる諸問題に取り組む必要がある」[52] からである。

相互依存論によれば、現実主義のビジョンにおける第１の前提は、国家は一枚岩の単位であり、世界政治の支配的アクターであるということ[53] だ。そして次のように指摘する。

> より小さな国家の方が、より巨大な国家よりも内部の政治的統一の度合いは大きいだろう。もし、より力のある大きな国家が、他への依存が少ないと概括的には言えたとしても、内部的にはそのような国家のほうがよりバラバラであり、その一枚岩の首尾一貫性と目されるものは、異質な利益間の闘争と政府内のコーディネーション（調整）の困難さから、相当程度損なわれているはずである[54]。

相互依存論はここで、国際関係において支配的である、一枚岩の国家アクターという現実主義の世界観の基本的前提を掘り崩そうとしているのである。では、相互依存論は具体的にはどのようにして現実主義の、特に国家と非国家主体の間のヒエラルキーを掘り崩そうとしているのであろうか？

複合的相互依存というそのイメージは、世界政治に直接に「参加」する国家以外のアクターをも見ており、「多元的チャンネル」という考え方が「諸社会」をつなげていると考える。公式な外交担当政府部局によるアレンジメントだけでなく、非国家的な非公式つながりもまた、非政府の人々やトランスナショナルな組織を多様につなげている[55]。この事実は「トランスナショ

52　ibid. p. 8.
53　ibid. p. 23.
54　ibid. p. 19.
55　ibid. p. 24.

ナルな諸アクターたちは存在しないか、政治的に重要ではない」[56] という現実主義的仮定に反するものである。

また、「国際」と「国内」の「高」と「低」政治の間に存在するとされるヒエラルヒーについても、相互依存論は国内要因の方こそ、より強力で影響力のあるものと評価する。複合的相互依存状態では

> 様々な諸国の国内政策がより一層お互いに影響しあい［...］対外経済政策は、さらに過去に比べると格段に、国内的な経済活動に関わっており、そのことはこれまで国内と外交政策の間に引かれていた分断線を消し去るとともに、そもそも外交政策に入れられる問題領域の数を増やしつつある[57]。

『パワーと相互依存』とは、別の言い方をすれば、現実主義をよりリラックスに改変したモデルによって、世界を理解しようとする試みである[58]。少なくとも相互依存論が、現実主義の基本的前提である、国際関係における支配的アクターとしての一枚岩的国家という既存の理解を掘り崩したのは明らかであり、またそのことが国際関係研究のパースペクティブを広げたことも事実である。

小結

この節では、「ヒエラルヒー」と「パワー」という概念に着目することによって、相互依存論が現実主義式に理解された世界像に対して行った挑戦をまとめてみた。コヘインとナイらの主張を考察することにより、複合的相互依存という現代世界の示す特徴が明らかにされただけでなく、現実主義国際関係論が主張する、軍事主義と国家主義という秩序原理を批判し明確に理解する強力な道具をもまた手に入れることが可能となった。『パワーと相互依存』の中には、相互依存論はどのように現実主義に挑戦したのかという本章のテーマにコヘインとナイ自身が自ら答えている部分があるので、これを最後に本章の答えとして引用しようと思う。

> 私たちは、複合的相互依存という見方が誠実に世界政治の現実を映し出しているとは主張しない。それとは逆に、現実主義と相互依存論のいずれもが理念型（ideal type）である。多くの現実の状況が、この 2 つの極端な理念型の間のどこかに落ち着くだろう。時として現実主義の前提が正確であることもあるかもしれないが（あるいは、「広

56　ibid. p. 24.
57　ibid. p. 26.
58　ibid. p. 25.

く」とって的を得ているという程度のときもありうるが)、しかし複合的相互依存論の方がより頻繁に、現実のよりすぐれたポートレートを提供することになるだろう[59]。

4．結論にかえて

従前、国家主義 statism と言われてきた現実主義には、しかしながら、存在論レベル（アクター）での議論で国家主義として規定しうるその前提に、基底として主概念としての「パワー主義」とでも呼ぶべきものが存在する。以上の議論は、それを明らかにしたと思う。モーゲンソーとカーの比較により、主概念としてのパワーに対する理解の違いが、同じ現実主義の中でも異なるパラダイムを提示していることが示され、また、モーゲンソーとナイたちの議論の対比からは、主概念の文脈を作り出す (contexualise) 各分析レベル及び問題領域などのとの影響関係を見て取ることができた。

これまで、国際関係論では 3 つの分析レベルとして、存在論、認識論、方法論（ontology, epistemology, methodology）の違いが、現実主義、自由主義などとよばれる諸理論•パラダイム間の違いを示すものとされてきたが、この可視化されてきた分析レベルの三角形のさらに外側に、より正確にはその基底に主概念や世界観があり、それに基づく問題領域、およびそれらの間のヒエラルヒーがそこに派生する。そこに問題の要がある。それゆえ、諸理論を検証するためには、まずそれらの間のダイナミズムを検討しなければならない。したがって、国際関係理論の再検討のためには、各理論の 3 つの分析レベルの、さらに外側に存在する基底的理論の構成要素や特徴を特定し、そこからより立体的に再構築された理論において比較し、今日的状況に対応した理論的枠組みへの展望を切り開いていかなければならない。マルクス主義の国際関係論以降の事例を含めた、包括的な理論整理の枠組み作りは今後の課題としたい。

（原稿受理2008年 6 月 6 日、最終採択2009年 1 月29日）

59　ibid. p. 24.

《SUMMARY》

Power and Paradigms in Classical Dominant Theories —The Reciprocal Relations between Core Concept and Three Levels of Analysis in International Relations

Makoto WATANABE

This paper aims to consider the role of what I call "core concept" in the transformation of theory of International Relations. Focusing on the commonalities and differences between classical theorists such as Carr, Morgenthau, Keohane and Nye, this argues that theoretical evolution as well as constitution is generated from the dynamism between "core concept" and three levels of analysis; ontology, epistemology and methodology. Certain set of assumptions oriented from the concept of power is such an example in the theories of Realism which demonstrates certain contrast well even between Realists as in the comparison of Morgenthau and Carr. The challenge of interdependence theory well illustrates not only the pivotal position of the "core concept" but also its relations to each level of analysis especially ontology. Studies on paradigmatic change of theories require not only the survey based on the level of analysis but also "core concept," hierarchy among issue areas and world view.